

Kanagawa Library Association

巻頭言 神奈川県立図書館開館 60 周年 おめでとうございます・・・・・	1
特集：県立図書館の 60 年	
創立 60 周年を迎えた県立図書館－そして明日へ・・・・・	2
研修会レポート	
「東京子ども図書館見学研修会」・・・・・	4
編集後記	

神奈川県立図書館開館 60 周年 おめでとうございます

研修委員長 相模原市立相模大野図書館長 岡崎 扶佐子

近年、都道府県立図書館のあり方が各地で問われています。これまでも市町村立図書館との役割の違いや、あるべき姿が議論されてきましたが、神奈川県でも 2012 年に県の緊急財政対策に基づく県立の図書館機能の見直しにより、県立図書館存廃の議論が起きました。

神奈川県図書館協会では、都道府県立図書館は今後、何を目指し、どうあるべきかを考えようと、県立図書館が開館 60 周年を迎える本年、11 月 7 日開催の第 16 回図書館総合展フォーラムにおいてこの問題を取り上げることといたしました。

「県立図書館のこれから」と題し、筑波大学名誉教授の葉袋氏、国立国会図書館関西館の渡邊氏、座間市立図書館の葉山氏、神奈川の県立図書館を考える会の末廣氏をパネリストにお招きし、それぞれの立場からお話をいただくことになっております。

皆様にも是非ご参加いただき、今後の県立図書館のあり方、市町村立図書館との関係などについて、一緒に考えていただければと思っております。多く

の皆様のご参加をお待ちしております。

さて、当協会の研修委員会について少し紹介させていただきます。委員は、公立図書館・大学図書館・専門図書館の職員 15 名です。委員会は、年 2 回開催、5 月頃に年間の研修計画を立て、担当者を決めます。2 月頃に、活動のまとめと反省を行います。研修は、研修委員会で企画・決定しています。今年度も 10 回の研修を計画しており、図書館総合展をはじめ、大学図書館と公共図書館の連携、大学図書館の見学、県の子どもの読書活動推進フォーラム、窓口対応での接客術や児童書の選書の仕方や書評の書き方、視聴覚資料を中心とした著作権の研修等を予定しております。

当協会の研修が、皆様により身近で、参加しやすい研修となるように、担当委員が知識と経験を活かし、各回の研修のテーマや講師など、調整しながら決めています。今年度後半の研修も、図書館職員としてのスキルアップに繋がること間違いありません。ご参加をお待ちしております。

特集：県立図書館の 60 年

創立 60 周年を迎えた県立図書館—そして明日へ

神奈川県立図書館 大塚敏高

■前川國男さん設計の建築

今から 60 年前の 1954 年 11 月、横浜市西区紅葉ヶ丘の地に神奈川県立図書館が誕生し、サービスを始めました。全国の都道府県立の図書館のなかで、最後から二番目、それも戦後になって生まれた図書館です。

ご存知のとおり建物を設計したのは、戦後の建築史に新しい一頁を開いた前川國男さん。60 年前の建築雑誌に、一緒に設計に携わった鬼頭梓さんが、「民衆のための公共図書館のあり方」という素晴らしい一文を載せていますが、(『新建築』Vol. 30、No. 1、1955. 1.) その文章を読んだだけでも、この図書館は、「民衆」というものをいかに意識していたか、さらに将来のネットワークを展望していたかが伝わってきます。

前川さん達が考えた新しい図書館を、見事に具体化していったことが、建築の随所に見てとれます。中央に書庫を配置し、カウンターの前は吹き抜けとなっています。日よけのルーバーが、デザインとしても美しい。また柵目模様になった枠型ホローブリックが、屋外の明るさをある程度取り入れつつ、直射日光を入れにくくしています。

外観は、ほとんど変わってないといって良いでしょう。内部も、2 階へあがる階段がなくなったくらいで、60 年前の清新な雰囲気が漂います。60 年前に作られた図書館が、決して古くはなく、今も生きて立派に県立図書館として役に立っているということに、私たちは誇りをもちます。



1960 年代の本館 1 階、画面右端に階段が見える
(県立図書館所蔵)

■市町村と密接につながった図書館

神奈川県立図書館を特徴づけるものは色々ありますが、そのなかで、これというものをあげると、市町村との関係は、まずその一つとなるのではないのでしょうか。

創立時に、3 つ掲げた基本的方向のひとつとして「市町村立図書館その他の読書施設を育成し、県内図書館網を組織して各図書館の機能が発揮できるように指導と助言を与え、適切な資料提供を行う。」ということがあげられていました。言葉の使い方で『指導』などという古臭い表現が入っているとはいえ、市町村の図書館、読書施設を育てて、県内図書館網を組織するということが入っていること、これは開館当初からの市町村との関係の密接さを示しています。

1949 年から県教育委員会が実施していた貸出文庫事業を引き継ぐ形で 1955 年 5 月、自動車文庫事業が開始されます。その後、自動車文庫事業は、徐々にサービスポイントを増やし、1976 年度には 318 箇所を数えるに至ります。

自動車文庫事業で私が経験したことですが、市町村の担当者と県立の職員が県立の移動図書館車に同乗し、アナウンスは「〇〇市立図書館です。」とやるわけです。このことになんの不思議を感じなかったものです。



1970 年代に使用されていた移動図書館車(県立図書館所蔵)

この後、1980 年代からは、協力車の時代になります。「WANTED」と名づけられた、探している本のリストを使って、県内のどこの図書館でも同じ本を探すことが現実に行われ、それこそ県立図書館と全ての市町村立図書館が「草の根を分けても」という感覚を共有する体験をしてきました。

研修会レポート 「東京子ども図書館見学研修会」

(2014 年 7 月 15 日実施)

7 月 15 日 (火)、今年で 40 周年を迎えた「東京子ども図書館」の見学研修会を開催しました。

始めに「おはなし会」(約 30 分)、続けて東京子ども図書館の成り立ちや事業についての DVD (約 20 分) を視聴、その後、2 班にわかれて館内を案内していただきました。

「おはなし会」では、4 名の職員の方に実演をしていただきました。始めるにあたり、職員の方から「ただ聞いて楽しんで欲しい」とお話がありました。「おはなし会」が進んでいくうちに、職員の方の、本を見ないで語る姿に、自然と物語の世界へ吸い込まれて行く感覚を覚えました。終了後、物語の暗唱についてお聞きしたところ、開館以来行っているストーリーテリングを大切にしているので、物語の内容を覚えているとのことでした。キャリアの長い方は、多くの作品を覚えているそうです。

館の成り立ちや事業についての DVD では、東京子ども図書館の前身である、児童文庫からの活動、「おはなしのろうそく」などの出版物や、設立より開催している「お話し講習会」による人材育成などの説明を受けました。他にも「3.11 からの出発」と題した、震災復興支援プロジェクトも行っているそうです。

館内見学では、資料室、児童室、おはなしのへやを見学させていただきました。

資料室は、大人向けの研究資料室となっており、研究用の資料収集が進められているそうです。中でも、児童文学や読書に関する研究書や、地方や海外を含めた昔話の資料の収集には、特に力を入

れており、所蔵は約 18,000 冊になるとのことでした。また、海外の図書賞を受賞した作品のコレクションも所蔵されていました。

児童室は、3 歳から中高生までを対象とした図書室となっており、読み聞かせや本の紹介の他にも、楽しい催し物をいろいろ開いているそうです。絵本や物語など、来館する子ども達に、ぜひ読んで欲しいものを選んで収集し、現在約 8,000 冊を所蔵しているとのことでした。

おはなしのへやは、やや小さいスペースにロウソクや暖炉があり、温かい雰囲気を感じました。こちらの部屋では、子供たちに絵本を読んだりする「おはなしのじかん」などを開いているそうです。

今回の研修では、おはなし会の実演や貴重な資料を見学することができ、とても有意義な時間となりました。子どもと本に関心のある大人にも開かれた図書館。ご興味を持たれた方は、ぜひ一度訪れてみてはいかがでしょうか。

(神奈川県立川崎図書館 吉田顕治)



編集後記

協会報 248 号は、県立図書館創立 60 周年を特集しました。連載「わたしのイチオシ」でも、県立図書館が所蔵している貴重な資料を紹介いただく予定でしたが、紙面の関係で次号の掲載とさせていただきます。

さて、本年もパシフィコ横浜において第 16 回図書館総合展が 11 月 5 日 (水) ~ 7 日 (金) の日程で開催されます。神図協では期間中、展示ブースの出展のほか、7 日 (金) には研修委員会によるフォーラムを開催いたします。多くの皆様の御来場をお待ちしています。

詳細は、図書館総合展ホームページ：<http://www.libraryfair.jp/>をご覧ください。

また、11 月 2 日 (日) には、横浜市教育委員会主催の「横浜市読書活動推進ネットワークフォーラム」がパシフィコ横浜で開催されます。

詳しくはホームページ：<http://www.city.yokohama.lg.jp/kyoiku/library/event/> をご覧ください。